歳末特選会

OKUDA RENPOUDO
Winter Art Fair

2022年
12月3日（土）－ 12月13日（火）
期間中無休

奥田連峯堂

奥田連峯堂
TEL:075-561-3655
FAX:075-525-1148
営業時間：11時 - 18時
定休日：毎週水曜
〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244
https://www.renpoudo.com
✉ renpoudo@mth.biglobe.ne.jp

１．

春秋蒔絵硯箱

由木尾 雪雄

明治 - 昭和
縦24.3cm　横22.5cm　高さ5.4cm

蓋の表には、松の間を舟が通り過ぎている情景が蒔絵されています。蓋裏には、蒲公英、椿や萩が蒔絵されています。筆、墨入、小刀、錐が入っています。これからの筆道具にもそれぞれ草花が蒔絵されています。唐草文様の水滴も付いています。硯を外すと「雪雄」と蒔絵で書かれています。

由木尾雪雄は、金沢から東京に出て、明治から昭和にかけて活躍した蒔絵師です。

蓋裏

硯箱を開けたところ

硯などを外したところ

２．

緑釉木瓜形香炉

古清水

江戸時代
径23cm　高さ18cm

幕末に磁器焼成が本格的に始まり、これが「清水焼」と呼称されるようになると、江戸時代中期以前に京で焼かれた陶器を「古清水」と呼ぶようになったと言われます。また、江戸時代後期にあっても磁器とは異なる京焼色絵陶器の総称としても用いられています。

その形状から、丁子風炉の下の部分ではないかと考えられます。
透かしの部分に焼成時に窯でできた割れが見られます。

箱には「古清水緑釉　木瓜形香炉　泥中庵蔵六識」と、
「泥中庵蔵六師より昭和十年初秋拝受」と書かれた貼札が有ります。

焼成時に窯でできた割
れ部分

３．

草花図茶碗

御菩薩焼

坐忘斎書付箱
幕末明治頃
径12cm　高さ8.3cm

全体的に細かな貫入が入り、色とりどりの草花が描かれています。見込みには、窯の焼成時に降った鉄の小さな黒点や小さな気泡のハジケが見られます。高台脇に「御菩薩」と「仁清」の印があります。

箱は、古い箱と新しい箱の2つの箱に収められた、めがね箱になっています。ひとつは元々の古い箱で、蓋甲に「美そ呂」と書かれています。もうひとつの新しい箱には、裏千家 坐忘斎宗匠の箱書きがあります。

御菩薩焼（みぞろやき）は、現在、古清水と呼ばれる初期京焼の一つです。江戸初期から粟田焼や清水焼に続き、上賀茂で始まりました。文献によりますと、山城国愛宕郡御菩薩村で焼かれた京焼の一種で、御菩薩村は「京の三条大橋からおよそ、五拾町程北の地である」とあり、「現在の京都市北区上賀茂深泥池湖畔である」との事です。御菩薩焼の創始者といわれてる万右衛門が、深泥池のほとりに住居をかまえ、池の西側のケシ山の山すそにある御用谷（ごえんだに）に窯場を造ったとも言われており、この他にも諸説あります。

新しい箱の坐忘斎書付

古い箱と蓋甲の「美そ呂」の文字

４．

花扁壷

河井 寛次郎

共箱
昭和
口径12.8cm×10.5cm　胴径18cm×10.5cm　高さ20cm

大正から昭和の時代、民藝運動の中心的役割を担った陶工 河井寛次郎の作品です。
胴の両面に、辰砂の赤、呉須の青、鉄釉の茶色を用いて花文様が描かれています。

５．

花文扁壷

河井 寛次郎

河井敏孝極箱
昭和
口径13.8cm×10cm　胴径21cm×14cm　高さ27cm

白地に花扁壷が両面に描かれています。
一般的な寛次郎の作品より背が高いです。
このような大きな作品は数が少なく、
飾り映えもします。

反対側

６．

花燈文器

和太 守卑良

共箱
昭和 - 平成
径16.5cm×14.7cm　高さ31cm

和太は、高知県安芸の古窯の復興に従事し、その後笠間で窯を築き、各展の入選を重ねました。伝統的な部分と独創的な文様が相重なり、独創的な作品を生み出しました。

７．

象嵌彩窯変 彼岸 盒瓶

今井 政之

共箱
1984年
所載：「土と炎の舞展　今井政之　象嵌の世界」
　　中国新聞社、1994年
径25.2cm　高さ40.6cm

今井政之は、大阪で生まれ、広島県竹原市で育ちました。備前で修業後、京都の楠部彌弌に師事しました。京都に窯を築き、その後、郷里の竹原市にも窯を築きました。花や魚の模様を象嵌する技法の第一人者として知られます。

本作品は、「今井政之　象嵌の世界」展の図録に掲載されています。
計算された炎の配分によって幻想の世界を醸し出しています。

８．

練上嘯裂茶碗

松井 康成

共箱
昭和 - 平成
人間国宝
径12.8cm　8cm

松井康成は練上の技法を極める中で、表面にあえて傷をつけ、裂け目を模様として生かす嘯裂という技法を編み出しました。本作のお茶碗にもこの技法が用いられています。赤（ピンク）、青（藍色）、白などのカラフルな色が使われています。高台脇に「康」の描銘があります。

９．

練上花入

松井 康成

共箱
昭和 － 平成
人間国宝
胴径9.6cm　高さ21cm

筒状の花入です。途中までは鶉手の模様で、途中から横縞模様に変わります。底に「康」の描銘があります。

松井康成は、茨城県笠間市の陶芸家で、昭和から平成に活躍した作家で、練上の分野で人間国宝に認定されました。練上の分野で様々な独自の技法を生み出しました。

１０．

交趾槌熨斗押、吉祥台

16代 永楽善五郎（永楽 即全）、2代 鈴木 表朔

共箱
昭和 － 平成
交趾槌熨斗押：径8cm×14cm　　高さ9cm
吉祥台　　：径53cm×28.5cm　高さ12cm

熨斗押は無地の紫交趾です。側面に緑釉と金彩で
宝珠文様が描かれています。
吉祥台とセットになります。
吉祥台は、足部分が外れる組み立て式になります。

１１．

青磁袴腰香炉

2代 宮川 香山

共箱
大正 - 昭和
径10.5cm　高さ9cm

本作の香炉の形は、中国古代青銅器の器形に倣って作られたものです。日本では袴を身につけた姿に見て袴腰と呼ばれています。
中国 南宋時代に制作されたものを宮川香山が写した作品です。

１２．

絵替四方向付　6客組

13代 楽 惺入

共箱
大正 - 昭和
径10.5cm×10.5cm　高さ3.8cm

水仙、梅、福寿草が各2客ずつ描かれた計6客組の向付です。
お節の器や取り皿にもお使い頂けます。

１３．

花寄汲出　12客組

9代 白井 半七

共箱
昭和
径9cm　高さ5cm

12カ月の月々の代表的な草花を主題にした汲出碗です。

白井半七は、江戸時代より続いた陶芸家の名跡です。初めのころは今戸焼と呼ばれる瓦器に施釉した楽焼風の軟陶を制作したり、今戸人形を制作したりして隆盛しました。8代白井半七の時に、小林一三の招きによって兵庫県に移窯しました。

１４．

金襴画朱塗昔形煮物椀　10客組

象彦 監製

共箱
昭和
径14.4cm　高さ8.5cm

内外共に朱色に金で絵付けされた煮物椀です。蓋の表には福の字が書かれ、見込みには寿の字が書かれたおめでたいお椀です。

象彦は、江戸時代より続く京都の漆器商です。三井家をはじめとする旧財閥や皇室などの愛顧をうけて、数多くの名品を制作しました。

１５．

乾山写雲錦茶碗

9代 白井 半七

淡々斎書付
共箱
昭和
径12cm　高さ8cm

胴の外側と内側に桜と紅葉が華やかに描かれています。
高台脇には半七の印が有ります。
箱の蓋の甲部分に「五十ノ内」と書かれています。

１６．

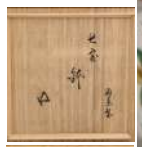
七宝鉢

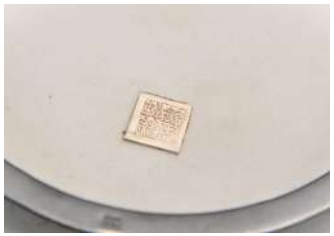
錦雲軒 稲葉七宝

鵬雲斎書付
共箱
昭和
径19.5cm　高さ9.5cm

胴の外側にはぐるりと一周に渡り、魚藻文が描かれ、見込みには七宝文様が描かれています。

稲葉七宝は、創業明治22年の京七宝の老舗です。
明治33年には、パリの万国博覧会にて出展作品が銀盃を受賞、翌年にはベルギー皇室御用達に任命されるなど、海外には早くから高い評価を受け、愛好家の間で「稲葉クロワゾネ（Cloisonne＝七宝）」として親しまれました。





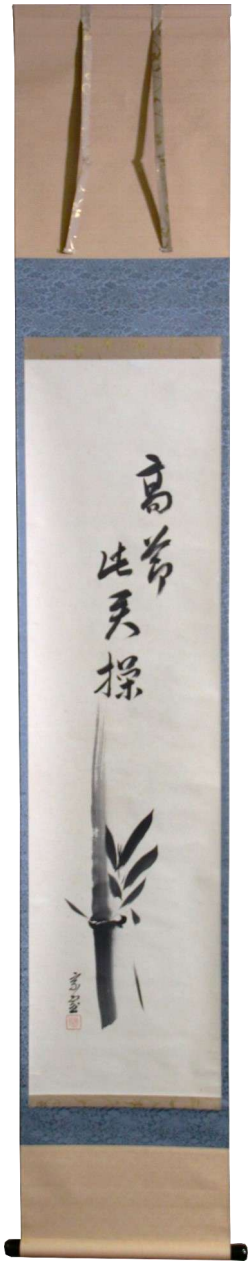
１７．

竹画賛幅

淡々斎

共箱
昭和
幅192cm　長さ32.5cm

竹の画に「高節此天操」の賛が添えられています。
高節は高い志や堅い信念という意味で、高い志は、目標を達成できるということになります。
また、竹は強風にも折れないため、苦境にあっても節をまげない高士にたとえられます。



１８．

篝火画賛幅

淡々斎

共箱
昭和
幅53cm　長さ120cm

篝火（かがりび）の画に「祇園 清水 花の宿」の賛が添えられています。
祇園枝垂桜は、円山公園の西側に位置する中央広場にあります。昼間もきれいですが、周りにかがり火が焚かれた夜桜が美しく、池の対岸から水面に映る姿も幽玄です。

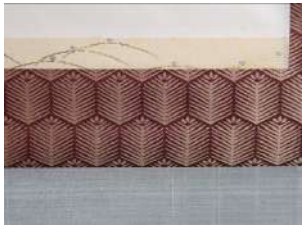
１９．

横物「松樹千年緑」字幅

淡々斎

共箱
1964（昭和39）年
幅81.5cm　長さ125cm

松樹千年緑は、松の木は千年の長い歳月を経ても変わることなく緑を保っているという意味です。
松樹千年翠と書かれることもあります。最晩年に書かれました。



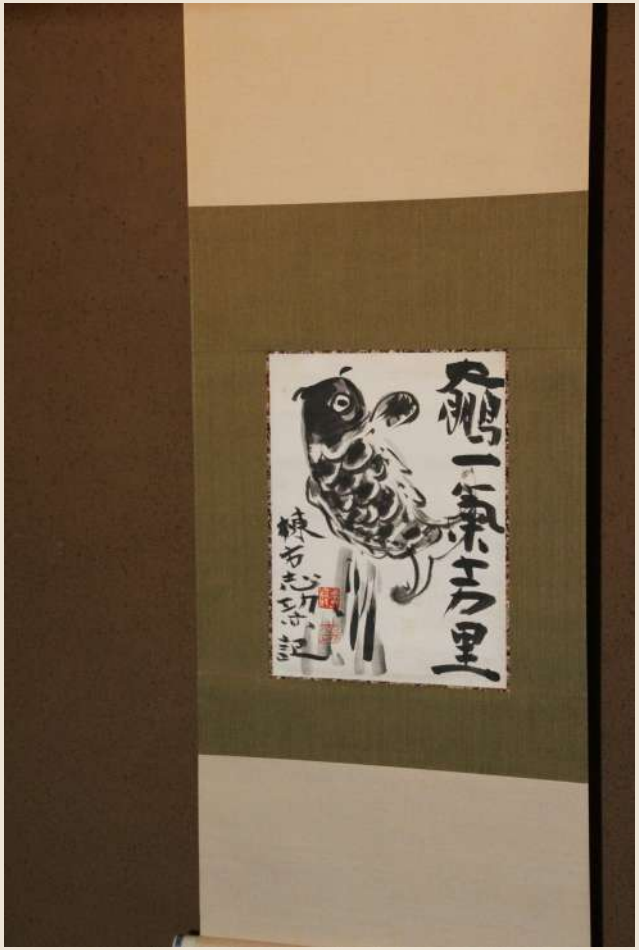
２０．

大鵬一氣躍鯉図幅

棟方 志功

紙本
棟方志功鑑定委員会 鑑定登録証有
昭和
幅40cm　長さ116cm

大鵬は想像上の巨大な鳥のことで、もとは鯤という巨大な魚が転身して鵬という鳥になったと荘子の書物逍遥遊篇にあります。
鵬が南の果ての海（南冥）に飛び立つとき、一挙に九萬里の高さまで舞い上がると言われています。
つまりは、大いなる計畫、大事業の成功を祈願した言葉です。
軸先はやきもので、福の字が書いてあります。


鵬一飛千里
棟方志功謹記

鵬一飛千里
棟方志功謹記

２１．

額　肉筆　天の字

芹澤 銈介

紙本
共シール
昭和
人間国宝
額：縦45cm　横37cm

黄、緑、赤色の布が舞う様子で天の字が表されています。
まるで布を宙に舞わせて描いた文字をそのまま造形化したような作品です。

２２．

額　型絵染　「𡚬」

芹澤 銈介

共シール
昭和
人間国宝
額：縦75cm　横45cm

喜の旧字体「𡚬」がデザインされた額です。
芹澤銈介作品展（阪急百貨店・1990年）の図録に類似品が掲載されています。

２３．

額　型絵染　「和」

芹澤 銈介

共シール
昭和
人間国宝
額：縦75cm　横45cm

芹沢銈介は文字の造形に強い関心を持ち、初期から晩年まで、大小たくさんの文字作品を制作しました。

作家略歴（五十音順）

今井 政之
1930（昭和5）年-
大阪生まれ。父親の郷里　広島県竹原市で育つ。18歳の時に陶芸家を志し、備前市伊部で修業。27年、京都に出て、勝男青龍洞に入門。翌年に楠部彌弌に師事。53年に広島県竹原市に築窯。平成5年、京都府文化賞功労賞を受賞するとともに、紺綬褒章を受章。30年、文化勲章。

永楽 即全（16代永楽善五郎）
1917（大正6）年 - 1998（平成10）年
14代得全の甥15代正全の子。妙全の養嗣子。三井家・三千家に出入りし数々の名品を作る。茶道隆盛と共に現代の名工の一人に数えられる。

河井 寛次郎
1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

9代 白井 半七
1928（昭和3）年 - 1987（昭和62）年
京都芸術大学卒業後、8代と同様に乾山写を得意とし、その他にも、独自の作風の茶陶も製している。昭和55年、兵庫県三田市大原に移窯。8代と共に料亭「吉兆」と親交を深めており、茶道具や会席の器など「吉兆好」の作品をよく残した。

2代 鈴木 表朔
1905（明治38）年 - 1991（平成3）
京都生まれ。父・表朔の元で漆塗りの技法を学ぶ。1926（大正15）年、21才の時に、聖徳太子奉賛展入選を果たしたのを皮切りに、創作活動を開始。京展入賞、帝展、文展などに出品を続け、昭和12年、パリ万国博銀賞を受賞。昭和53年、現代の工芸作家展出品、「漆と共に50年」記念個展を開催、昭和56年、古希記念個展を京都高島屋で開催。

芹澤 銈介
1895（明治28）年 - 1984（昭和59）年
静岡市生まれ。東京高等学校図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と沖縄の染物紅型に出会ったことにより型染めを中心とした道に進む。1956年、人間国宝に認定。

淡々斎
1893（明治26）年 - 1964（昭和39）年
茶道裏千家十四世家元。東京生。裏千家十三世円能斎の長男。幼名は政之輔、号に碩叟。30才で家元を継承。淡交会を結成、ついで国際茶道文化協会を設立し茶道の海外普及につとめた。紫綬褒章受章。

松井 康成
1927（昭和2）年 - 2003（平成15）年
長野県生まれ。明治大学を卒業し、茨城県笠間市にある浄土宗月崇寺の住職の跡を継ぐ。その後、廃窯となっていた、山門下の窯を再興し、東洋陶磁の研究を行う。栃木県の田村耕一に師事。練上手の技法を研究し、完成させ、昭和44年には、第9回伝統工芸総裁賞や日本陶磁協会賞などの数々の賞を受賞。平成5年、人間国宝に認定。

2代 宮川 香山
1859（安政6）年 - 1940（昭和15）年
横浜の陶芸家。本名半之助。帝室技芸員の初代香山を助け優れた作品を残す。大正5年、初代香山逝去後、正式に2代香山を襲名する。帝展・各美術展に出品した。板谷波山と並んで関東の美術界に君臨した。

棟方 志功
1903（明治36）年 - 1975（昭和50）年
20世紀の美術を代表する世界的巨匠の一人。日本の板画家。青森県出身。昭和17年以降、彼は版画を「板画」と称し、木版の特徴を生かした作品を一貫して作り続けた。

13代 楽 惺入
1887（明治20）年 - 1944（昭和19）年
十二代弘入の長男。大正8年、家督を継承、吉左衛門を襲名。作風は、独自に各地の鉱石を研究し、楽茶碗のほかにも各地の陶磁を積極的に制作している。置物にも意欲的に取り組んだ。没後、惺斎宗左より号、惺入を賜る。

和太 守卑良
1944（昭和19）年 - 2008（平成20）年
兵庫県西宮市出身。1967年に京都市立美術大学陶磁器専攻卒業。学長の依頼で高知県安芸市にて古窯の復興を手がけ陶器制作を始める。1977年、茨城県笠間市に移住。1980年、ファエンツァ国際陶芸展金賞受賞。1983年、日本工芸会正会員。1988年、日本陶磁協会賞受賞。